みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Toward the Anthropology of Prestige Goods of the North Pacific Rim : With a Focus on Hunter-Gatherer Societies in and around Alaska

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野口, 泰弥 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00010004

岸上伸啓編『環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究動向』
国立民族学博物館調査報告　156:315–336(2022)

環北太平洋における威信財の人類学にむけて
── アラスカ周辺地域の狩猟採集民社会を中心に

野口　泰弥
（北海道立北方民族博物館・東北大学大学院）

1　はじめに
2　環北太平洋北米地域の先住民と威信財の定義
3　文化人類学における威信財研究
4　環北太平洋北米地域の社会階層化研究と威信財
5　結論

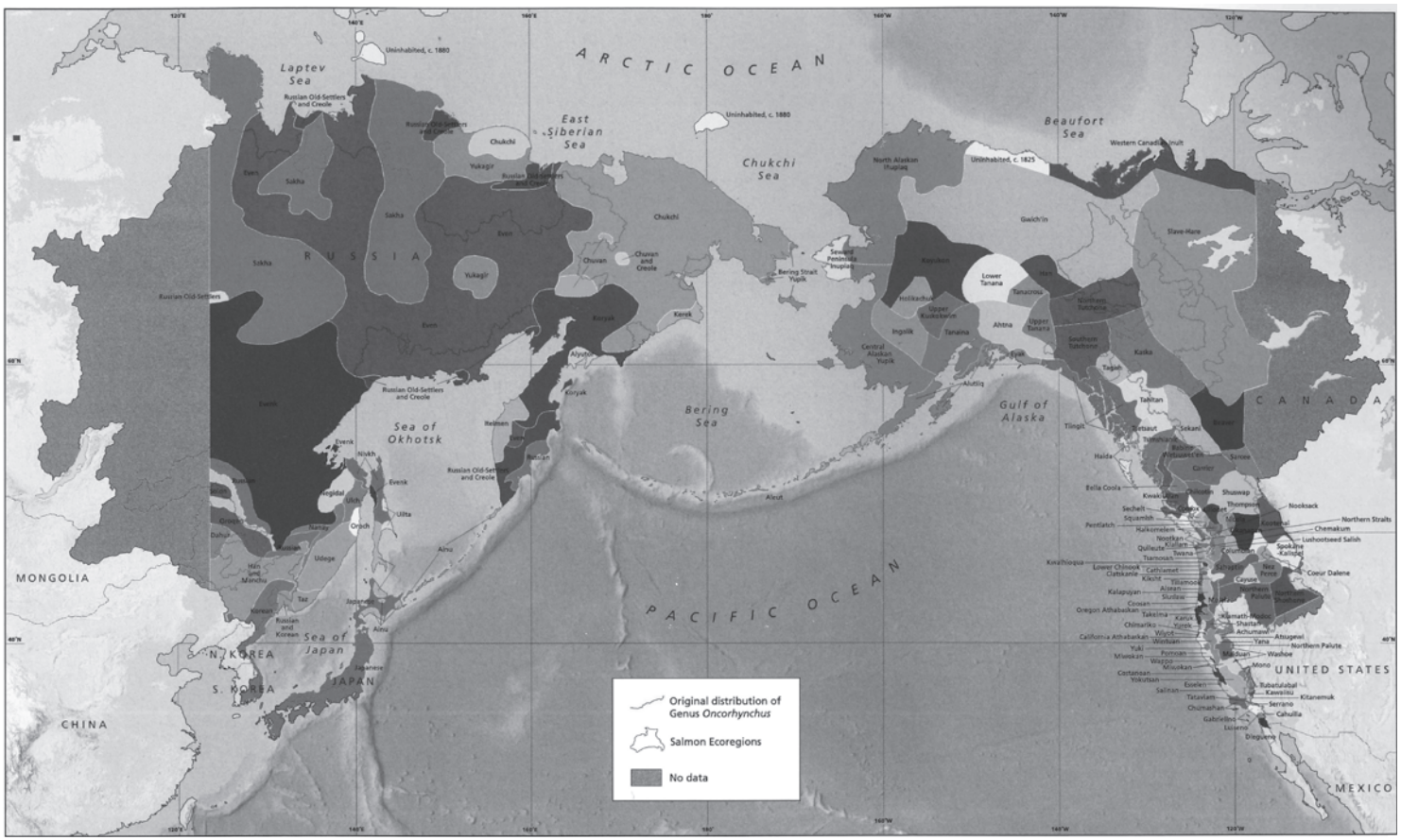
1　はじめに

環北太平洋沿岸には複数の狩猟採集民社会が存在する。フランツ・ボアズが組織したジェサップ北太平洋探検（1897–1902）を嚆矢として，新旧両大陸にまたがるこの地域の社会・文化的類似性の解明を目的とし，現在に至るまで様々な比較研究が行われてきた（岸上 2015: 7–18）。

この地域の諸社会の最大の特徴は複雑性，ないしは社会階層の存在であり，その具体例の１つとされてきたものに宝物類の発展という現象がある（渡辺 1992: 71, 81–84; テスタール 1995; Townsend 1980: 141–142; Hayden 2014: 645）。環北太平洋の諸社会を広範に比較した渡辺仁は，社会の上層である富者の「信望を示す物品（prestige goods）」の代表が宝物や家宝の類であり，それら「社会的威信の維持・獲得に必須の貴重品」を，婚資や紛争調停などの手段として使用することが，この地域の社会や文化を複雑化する基本要因になっていると指摘した（渡辺 1992: 80–82）。

渡辺の見解に従えば威信財（prestige goods）は，この地域の社会的特徴の形成に強く影響していることが示唆されているが，この地域における社会の複雑化のプロセスと，それに果たす威信財の役割については未だ定説と呼べる見解は無い。そして，環北太平洋地域の人々にとって，威信財とは一体いかなるものかという問いについて，各社会の様々な威信財を具体的に比較した上でその特徴をあぶり出し，複雑化との関係を検証するという研究も渡辺（1990）以降ほとんど見られない。

本論文では，文化人類学における威信財研究[1)]と環北太平洋地域における階層化研究を整理し，環北太平洋の威信財研究の課題を示すことを試みたい。環北太平洋の階層化論はできる限り各論者の威信財の扱いに力点を置きつつ，網羅的とは言えないが必要に応じて考古学分野の研究にも言及する。



地図1　1880年頃の環北太平洋の先住民とサケ・マス類の遡上地域
（出典：Augerot 2005: 19）

2　環北太平洋北米地域の先住民と威信財の定義

はじめに本論文が対象とする地域／民族集団と威信財の定義を明確にしておこう。環北太平洋という語は明確な定義があるわけではないが，渡辺は概ね北緯30度以北の太平洋沿岸とそこに暮らす人々を想定している（渡辺 1992: 69）。この領域は一定の気候的，生物学的な多様性が存在するにも関わらず，赤道付近の海域とは異なる１つの生態的システムを構成している（フリーマン 2006）。渡辺によればこの地域（地図１）には日本（アイヌ），シベリア東部（アムール川下流定住民：ニヴフ，ウリチ，ナーナイなど），カムチャツカ（イテリメン），アリューシャン列島（アリュート），アラスカ南西部（太平洋エスキモー），アラスカ南東部〜カナダ・ブリティッシュ・コロンビア（BC）州（北西海岸先住民），カリフォルニア北部（カリフォルニア先住民）などが含まれる（渡辺 1988; 1992）。この地域はタイヘイヨウサケ属（pacific salmon）のサケ・マス類の遡上地域であり（Augerot 2005: 18–19），渡辺が取り上げた民族集団は全て，サケ・マス類を中心とする水産資源に強く依存している狩猟採集民である。

本論文では筆者の民族誌的知見の限界もあり，議論の範囲を原則的に北米地域に絞りたい。その代わり北米に関しては，環北太平洋の沿岸という定義を少し広げて解釈し，渡辺が部分的にしか言及していない内陸部の北方アサバスカン諸族と，ベーリング海以北の沿岸部に暮らすイヌピアックも考察に含めたい。その理由は，北方アサバスカン諸族も程度の違いはあるが沿岸部の民族集団と同様に，ユーコン川やクスコクィム川を遡上するサケ・マス類に依存していたのであり，少なくとも19世紀にはトゥショーニなど一部の北方アサバスカン社会では階層化が起きていたと考えられているためである（e.g., Legros 1985）。またイヌピアックについても，大規模な階層化は生じなかったが，初期の階層化が発展しうる可能性があったことが先行研究で示されている（Schweitzer 2003: 92–96）。結果的に本論文ではアラスカ州を中心に，カナダ・ユーコン準州やBC州といったアラスカ州に隣接する地域の北米先住民社会を主要な考察の対象とする。また主に対象とする時代は比較的，「伝統的」な社会が維持されていた18世紀から20世紀前半としたい。

この地域の先住民社会は地理・文化・言語学的観点から大きく４つのグループに分類することが一般的である。初めに，(a) アリューシャン列島のウナンガン（アリュート），(b) アラスカ南東部からBC州沿岸の北西海岸先住民，(c) アラスカ南西部以北の沿岸部に暮らすエスキモー（北部沿岸のイヌピアック，西部沿岸のセントラル・ユピック，南西部のアルティック／スクピック，セント・ローレンス島のシベリア・ユピック），そして(d) 内陸部の北方アサバスカン諸族である。海洋資源の依存度は社会ごとに大きく異なるが，全ての集団が狩猟採集民である。

次に威信財の定義を確認する。本論文では威信財という用語を，狩猟採集民社会にお

ける階層化の考古学的研究を牽引するブライアン・ヘイデンが用いる意味で使用する。ヘイデンによれば，「威信ある人工物（prestige artifacts）を作る目的は実用的な課題を実行するためではなく，富や成功や権力を示すことである。その目的は，成功を示すことを通じて社会問題を解決させたり，生産的な仲間，労働者，同盟者を惹きつけたり，あるいは異なる社会集団のメンバーを結びつけるといった社会的課題を達成することである」（Hayden 1998: 11）という。

威信財という語は，元々はカール・ポランニーら経済人類学者，またその中でも特にマルクス主義人類学者たちの議論の中で精錬されていった概念だと考えられるが（e.g., Polanyi 1977: 109; Friedman and Rowlands 1978），現在では文化人類学よりも考古学において用いられることが多い。考古学者の下垣仁志は先行研究で用いられてきた威信財の 9 つの定義を比較し，(a) 原料や製品の稀少性，(b) 遠隔性，(c) 製作の困難性，(d) 社会関係を維持・構築する上での必要性および効果性というおおよその共通要素を抽出しているが，各定義には相違点もあり決定的な定義は存在していないという（下垣 2018: 72–73）。下垣は，日本考古学では威信財という用語が濫用されてきたため，威信財の理論的深化が進まなかったとしてその現状を批判し，この用語を，文化人類学者ジョナサン・フリードマンらが提出した「威信財システム」（Freidman and Rowlands 1978）という特定の社会段階において，その社会構造の維持・再生産に重要な役割を果たす器物にのみ使用することを提案する（下垣 2018: 71; 74–75）。威信財システムについては第 3 節で詳述する。

初期国家の出現に関心を持つ考古学者たちが，その前段階として位置づけられた「威信財システム」を評価し，威信財概念の空洞化を避けるために，用語をこの文脈でのみ使用しようとする主張はよく理解できる。その重要性は認めたうえで，ヘイデンの定義を採用するのは，威信財の概念を特定の社会段階における社会的再生産に必須な器物に限定してしまうと，本論文が対象とする様々な社会形態が存在するアラスカ周辺地域の諸社会には適用できなくなってしまうためである。そして，第 3 節，第 4 節で見ていくように威信財と社会の複雑性の関係については多様な見解があり，威信財の定義を必ずしも「威信財システム」との関係だけで捉える必要は無いというのが筆者の立場である。

ヘイデンの定義の特徴は威信財を，社会的課題を実行するために富や成功や権力を示すモノとして広く捉えることで狩猟採集民社会にも容易に適用することができる点である。これは下垣が整理した共通要素の「(d) 社会関係を維持・構築する上での必要性および効果性」を重視する定義であるが，(a)〜(c)の要素を否定しているのではなく，入手や製作に余剰労働力を必要とするという威信財の性質が，威信を表現するための戦略の 1 つとして捉えられている（Hayden 1998: 12）。

3　文化人類学における威信財研究

文化人類学において威信財という概念はマイナーであると言ってよいだろう。例えば，いくつかの文化人類学事典を紐解いてみても，「威信財」という項目は見当たらない。それは，文化人類学における威信財への関心の薄さを示しているかもしれないが，それでも威信財は近代人類学の出発に重要な役割を果たしてきたと筆者は考える。

文化人類学における威信財論の出発点はそれぞれが近代人類学の父といえるフランツ・ボアズ，ブロニスワフ・マリノフスキー，マルセル・モースの 3 人に求めることができる。はじめにボアズはBC 州のクワクワカワクゥ（クワキウトル）社会のポトラッチにおいて，競争的な贈与が行われていることを報告した（Boas 1897: 341–358; 1966: 77–104）。特にポトラッチで高額で売買される銅板に関する記述は文化人類学において威信財を考える出発点となったと言ってよい。ボアズによれば銅板はそれぞれ固有名がつけられており，販売されるたびにその価値が上昇する（Boas 1897: 344）。銅板は常にライバルに販売され，もしライバルが購入できないと，その「トライブ」やクランの権威は失墜することになり，時には自分の優位を示すために銅板を破壊することもある（Boas 1897: 345–346; 353–354）。

マリノフスキーはオセアニアのトロブリアンド諸島において，有名なクラを報告した（マリノフスキ 2010）。クラによって島々を循環するモノは 2 種の威信財（貝製の腕輪と首飾り）であり，クラを成功させてこれらの財宝を入手することが所有者に高い威信を与える（マリノフスキ 2010: 129–135）。クラは日常品の交易であるギムワリとは明確に区別されるが（マリノフスキ 2010: 338–340），それを行う機会を提供するほか，呪術，宗教，経済などを含む全体的な社会現象である（マリノフスキ 2010: 403–421）。

ボアズとマリノフスキーの報告を主要な情報源として執筆されたのがモースの『贈与論』である（モース 2014）。『贈与論』は多様な論点を含むが（岸上 2016），贈与が与える義務，受け取る義務，返礼する義務からなる事実上の交換であり，贈与交換がアーカイックな社会の基盤となっていることが指摘された（モース 2014: 230–258; 298–299）。さらに，贈与により与え手は受け手より上位に立つという指摘（モース 2014: 368），社会には決して贈与や交換の対象とならない聖物が存在するといった指摘（モース 2014: 258–259）などは，後続する威信財研究にも大きな影響を与えている。

言うまでも無く「贈与（贈与交換）」という概念は過去およそ 1 世紀にわたり文化人類学において最も生産性が高い概念であった。例えばレヴィ＝ストロースは交換を社会の基盤に据える視点を発展させ，彼自身も交換の観点から北西海岸の銅に関する集中的な考察を行っている（レヴィ＝ストロース 2018）。

モース以降，威信財は主にポランニー派の経済人類学者やマルクス主義人類学者たちによって議論されてきた。威信財に関わるポランニーの議論として原始貨幣論がある。

ポランニーによれば貨幣には（a）支払い，（b）価値尺度，（c）計算手段，（d）富の蓄蔵手段，（e）交換手段といった機能があり，近代貨幣はこれら全ての機能を兼ねる全目的貨幣である一方，原始貨幣は特定の目的に特化した特定目的貨幣である（ポランニー 1980: 186, 188–189; 2003: 86–89）[2]。富の蓄蔵機能は生存財と財宝とを分けて考える必要がある。ポランニーによれば財宝とは威信財のことであり，所有しているだけで所有者に重みを与える性質，またそれを与えても与えられても威信を増すという性質がある（ポランニー 1980: 207）。原則的に財宝は食料などの生存財とは交換されないが，王や首長は財宝を与えることで従者を奉仕させ，間接的に食料，原料，労働を大規模に確保することができると指摘された（ポランニー 1980: 207）。つまり，ポランニーにとって財宝は「その適切な使用のために持ち手を換えるというそれ自体の目的のために流通している」（ポランニー 1980: 207）のである。

ポランニーが述べる生存財と財宝（威信財）という区分はポール・ボハナンがナイジェリアのティヴ族を事例に，交換領域論として発展させている（Bohannan 1959）。ティヴ族には 3 つの交換領域が存在し，それらは階層化していた。低位な領域として日常品や食料の生存領域があり，それらのモノは贈与交換と市場を通じて流通する（Bohannan 1959: 492–493）。その上に，原則的に生存財と交換されることが無い奴隷，牛，真鍮の棒などが含まれる威信領域があり，この領域内の交換は真鍮の棒が価値の基準と支払いに使われた（Bohannan 1959: 493–494）。そして最も高位な領域として結婚対象の女性を主とする，人間に関する権利の領域があった（Bohannan 1959: 494）。そして同一領域内の交換（conveyance）は道徳的に中立であったが，領域間をまたがる交換（conversion）は本質的に不等価交換となり道徳的問題を伴った（Bohannan 1959: 496–499; 下垣 2018: 76）。この交換領域論はイゴール・コピトフの「モノの文化的履歴」論（Kopytoff 1986）に導入され，その分析枠組みは現在の威信財研究においても有効である（e.g., Cooper 2011）。

マーシャル・サーリンズは『石器時代の経済学』において，ポランニーが提起した互酬，再分配，交換という交換形態の分類（ポランニー 1980: 88–102）を受け，互酬性の類型と交換を行う集団間の社会的距離の関係をモデル化した（サーリンズ 1984: 223–248）。ここでサーリンズは交換領域論を援用し，食べ物と「富（威信財を含む）」との交換不可能性は，共同体の内部において当てはまるが，その外部では倫理的な葛藤も無く日常的に行われうることを指摘した（サーリンズ 1984: 267–268）。社会的距離と空間的距離は異なる概念であるが，ある程度は一致するものと考えられる[3]。この意味で，共同体内部では不可能な食べ物と「富」の交換が，その外部では可能になるという指摘は，威信財が遠距離交易と結びつきやすいということを考える上で示唆的であると言えるだろう。

代表的なマルクス主義人類学者であるモーリス・ゴドリエも，ニューギニアのバルヤ

族の塩の生産と流通を事例に，貴重品[4)]がバルヤ社会内では贈与，再分配される非＝商品でありながら，社会外部では物々交換される商品となる二重性を考察している（ゴドリエ 1976: 219–224; 256–258）。ゴドリエの重要な指摘は 2 点ある。まず貴重品の全てが貨幣なのではなく，その中においてバルヤ族の塩のように他の全商品と交換され，共通尺度となりうる物だけが貨幣となり，他の貴重品とは分けて考える必要があるという指摘である（ゴドリエ 2000: 245–248）。2 つ目は，バルヤ社会外部のモノは塩と交換されることによって商品となり，バルヤ社会内部に取り込まれ，そこで商品としての質を失って，衒示財，贈与財に再転化するという指摘である（ゴドリエ 2000: 256–258）。これはコピトフ（Kopytoff 1986）の論点とも類似しているが，モノが流通していく中で，その社会的性質が変化するという議論は，彼の「贈与できないモノ論」につながっていく。

ゴドリエによればバルヤ社会のあちこちで，煤で黒くなった古い塩の棒が囲炉裏の上に吊り下げられている（ゴドリエ 2000: 258）。この塩は，かつて敵であった現在の交易パートナーと調印した協約のシンボルであり，それらは交換や消費の対象ではないとゴドリエは指摘する（ゴドリエ 1976: 240; 258）。この観点は後に，『贈与の謎』（ゴドリエ 2000）において深められた。バルヤ社会では少年のイニシエーションに用いる「クワイマトニエ」という決して譲渡されない聖物があり，それは超自然的存在から祖先へ贈られたモノである。クワイマトニエは贈与されたり交換されたりしないが，バルヤ族のアイデンティティの基盤になっており，その存在こそが結果的に，他のあらゆるモノを流通させる力を生じさせているとゴドリエは主張している（ゴドリエ 2000: 160–198）。贈与や交換対象ではないクワイマトニエは威信財ではないという見解もあるが（石村 2014），ゴドリエの言う聖物というアイデンティティに結びつくモノのカテゴリーは威信財の性質を考えるうえで重要な観点を提示している。

ゴドリエと同じく，当時マルクス主義に立っていた人類学者であるジョナサン・フリードマンは，威信財と社会の複雑化の関係をモデル化した。この「威信財システム」論は考古学分野を中心に後続する研究に大きな影響を与えている。フリードマンはまず1975年の論文において，エドモンド・リーチの『高地ビルマの政治体系』（リーチ 1987）の再解釈を行い，ミャンマー北東部のカチンの諸社会において，現地の生態系，農業生産，技術，親族構造，祭祀での再分配，宗教が複雑に相関することで，平等主義的なグムラオ型社会が，世襲的首長を持つ階層化されたグムサ型社会に変容し，最終的にまたグムラオ型社会に戻るという社会構造の変化をモデル化した（フリードマン 1980）。

このモデルでは次のようなプロセスで階層化が進む（フリードマン 1980）。はじめに，グムラオ型社会において農業の余剰生産を生み出したリネージは，その余剰を共同体全体に対する祭祀で分配することで威信を獲得する。獲得された威信はリネージ内の娘の価値を増大させ，彼女たちを嫁に出すことによって，当該リネージはそれまでよりも相対的に大きな花嫁代償（威信財を含む）を得る。次に，新たに獲得した花嫁代償を利用

し，生産力増大につながる新たな妻の獲得や祭祀でのさらなる威信獲得をくりかえすことでリネージ間の経済格差が広がっていく。

フリードマンによればこの経済格差が結果的に女の与え手と貰い手の間での相対的なランキングへと発展していく。祭祀を行えるのは豊作による余剰生産があるためであるが，それは祖先である神に対する影響力が大きいからこそ豊作になったのだと現地の宗教観では見なされる。祖先神への強い影響力は，豊作のリネージが他のリネージよりも祖先神に近い系譜関係を持つためであると解釈されることで，神である共通祖先との系譜的距離によりリネージ間が階層化され（円錐クランの出現），グムサ型社会が形成される。その後もリネージ間の格差は広がっていくが，カチン社会では生態的，技術的制約から余剰の増産に限界があり，最終的にグムサ型社会は崩壊し，グムラオ型社会に逆行する（フリードマン 1980）。

グムサ型社会のような部族システムが，複数地方で同様に発展すると，首長間の同盟や交易が生じる。この場合，首長だけが長距離交易を行い貴重品（valuables）や威信財を入手できる。この段階では貴重品や威信財は主にステイタスシンボルとしてのみ機能する場合もあれば，それを獲得したり支配することが，後続する社会段階のように威信や権力に結び付くこともある（Friedman and Rowlands 1978: 211–215）。

フリードマンによれば，条件が整った地域ではカチン社会のような部族システムを超えてさらなる社会形態の「進化」（部族システム→アジア的国家→威信財システム→都市国家）が生じうる。その道筋を以下のようにモデル化したのがフリードマンとM. J. ローランズの共著論文（Friedman and Rowlands 1978）である。

完全に発展した円錐クラン構造において，ランクは祖先との系譜的距離によって生得的に決定されるため，首長はそれまでのように，自己のリネージの娘を低位者の妻として与える必要も，また共同体内の祭祀において気前のよい再分配を行う必要性も減少する。余剰生産の成功は，祖先神とその子孫の超自然的な力の結果として富が出現するという垂直的プロセスを強調するため，貴族層の地位が上昇し，貴族層の全てのリネージの先祖が，首長の神格化された先祖を頂点とする分節構造に取り込まれる。結果的に全ての貴族の地位が単一の王家との系譜的関係に基づく政治体制（アジア的国家）が出現する（Friedman and Rowlands 1978: 216–218）。

アジア的国家では大規模な儀礼的センターとその周辺の小規模なセンターが生じている。農業生産の増加は分業を拡大し，センターに集められた職人により専門的な工芸品が大規模に製造され，貴重品が儀式や短距離／長距離交易に使用される（Friedman and Rowlands 1978: 218–219）。王家による富の蓄積は，王家の超自然界への影響力の強さの証明であるため，儀礼用品として機能する威信財の発展は，その初期においてアジア的国家と相性がよい。しかし，威信財が婚資や各種の代償といった，社会的再生産に必要な一般的な交換財として使用されるようになると，威信財生産と流通を支配することを

権力の基盤とする社会構造が出現し，アジア的国家と区別できるものになる。この段階が威信財システムである（Friedman and Rowlands 1978: 221–222）。

この威信財システムにおいては，威信財が集団間の政治的同盟に利用される。中央である高位集団が威信財の生産と流通を支配しているため，周辺の下位集団は婚姻による政治同盟を通じ，朝貢を行うことでしか必需品となった威信財を獲得できない（Friedman and Rowlands 1978: 224–225）。このように威信財が社会のヒエラルキーの維持・再生産に埋め込まれた政治・経済構造が形成されていく。フリードマンらが提起した社会進化モデルはティモシー・アールやクリスチャン・クリスチャンセンなどの考古学者に影響を与え，現在もモデルの精緻化が進められている（小杉 2006: 21; 石村 2008: 127–129; 下垣 2018: 79–81）。

4　環北太平洋北米地域の社会階層化研究と威信財

環北太平洋先住民社会の威信財を研究する必要性は狩猟採集民研究におけるこの地域の特異性と関係している。文化人類学が伝統的に想定してきた狩猟採集社会のモデルは，(a) 遊動生活を行っており，(b) 運搬上の制約から動産や物質文化は最小限で，(c) 結果的に個人間の富の不平等が最低限に抑えられた平等主義社会といったものであった（e.g., Lee and Devore 1968: 11–12; サーヴィス 1972: 18–19）。しかし，環北太平洋沿岸の先住民社会の多くはこのモデルに合致しない。つまり，定住もしくは半定住的傾向が見られ，物質文化が発展しており，階層化が進んだ社会である。結果的に，特に北西海岸先住民やカリフォルニア先住民たちは豊かな環境が生み出した例外的な社会として扱われ，狩猟採集民研究の理論化から除外されてきた（e.g., サーヴィス 1972: 5, 1979: 42; サーリンズ 1972: 84–87; スチュワード 1979: 192–196）。

このような状況に異を唱え，環北太平洋の狩猟採集民社会における階層化の問題に取り組む文化人類学者が現れたのは1980年代に入ってからだった。初めに問題を提起したのはマニトバ大学のジョアン・タウンセンドである。彼女は1980年の論文において，南アラスカの先住民社会を分析するのに一般的に使われる諸概念（エスキモー／インディアン／アリュートの三類型や「部族 tribe」概念など）が，社会の分析概念としては無効であることを主張し，18〜19世紀の南アラスカは自治的な村を単位として，それらが複雑な交易網で結ばれ，モザイク状にひしめき合っていたと考えるべきだと提案した（Townsend 1980）。つまり上述の三分法のために，エスキモー，インディアン，アリュートにまたがる諸民族（具体的にはトリンギット，イーヤック，アトナ，タナイナ，チュガチ，コニアグ，アリュート）の社会的類似性が見逃されてきたと考えたのである（Townsend 1980: 123–129）。その類似性とはモートン・フリード（Fried 1967）が提案した「ランク社会」にみられるランキング制度であり，南アラスカの諸社会は，それよ

り北方の諸民族の平等主義社会とは明確に分けられるべきだとタウンセンドは主張した（Townsend 1980: 129–130）（地図２）。その上で彼女は南アラスカのランク社会の特徴を，親族組織や婚姻，交易や再分配，経済，奴隷と戦争，地位の相続などの観点から総合的に分析している。

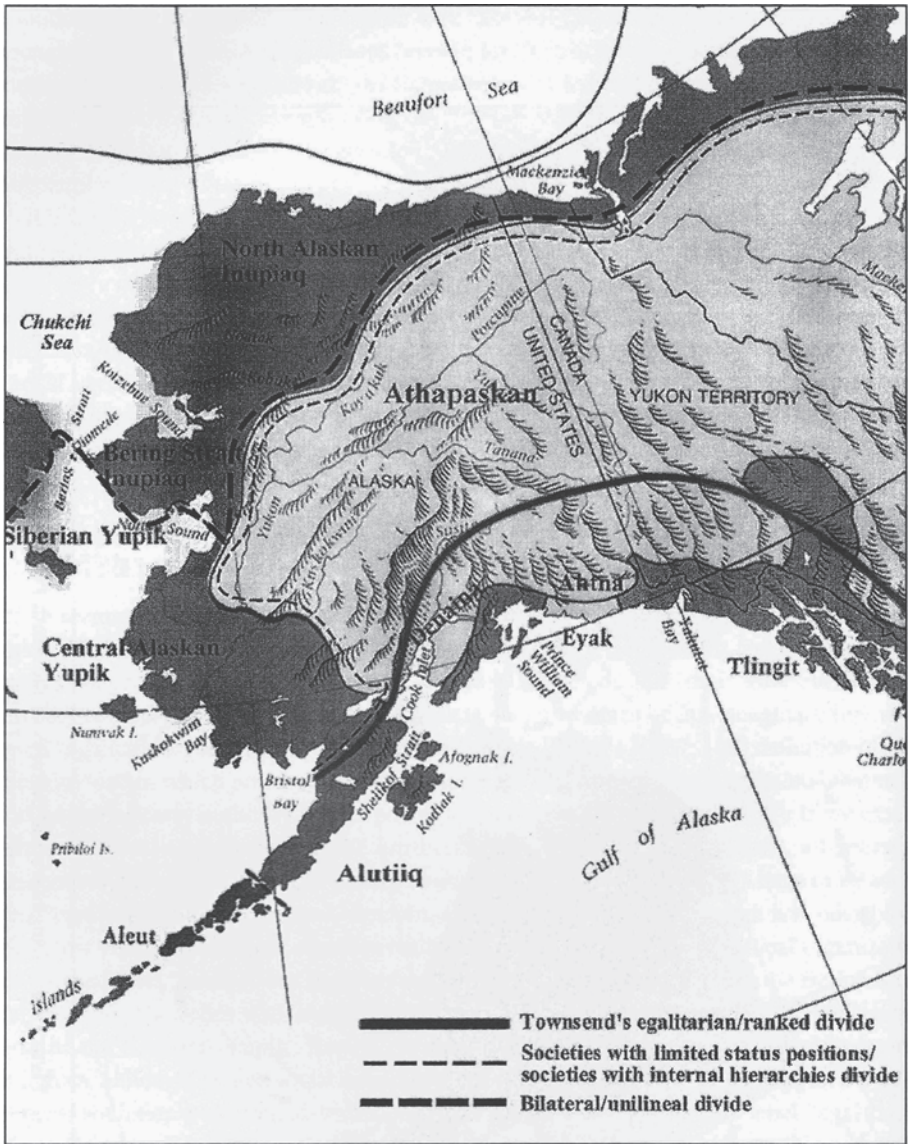
経済については一般（common sphere）と富（wealth sphere）という少なくとも２種の交換領域が存在し，全目的貨幣は存在しなかったが，奴隷やデンタリウムシェルが富の基準として使用されたと指摘された（Townsend 1980: 141–142）。富領域に含まれるモノとしてデンタリウムシェル，螺鈿，琥珀，珊瑚，銅，またアリュートにおいては木製の帽子が挙げられている（Townsend 1980: 141–142）。

タウンセンドは南アラスカにおけるランキングの発展をモデル化したわけでは無いが，安定した集中的な食糧供給と，それにより可能になる大規模な人口が関係しているという新進化主義の主張を踏襲している（Townsend 1980: 130–131）。そして，アリューシャン列島の一部やコディアク島のような，土地が限られている地域において，人口増加による資源圧が世襲制度や交易規制と結びついたときに，ランク社会からフリードが提起した階層社会への発展が生じつつあったことを，歴史資料を駆使して示した（Townsend 1980: 143–148）。

タウンセンドに続いたのがフランスのアラン・テスタールや日本の渡辺仁だった。テスタール（Testart 1982; テスタール 1995）は，狩猟採集民の例外とされる，一定の定住性や社会＝経済的不平等を有する社会は北アメリカ太平洋沿岸，シベリア南東部，北海道を代表に，南米のオリノコデルタや北米東部，西シベリアの一部地域などにもその兆候が見られる社会が分布しているとして，例外とするにはあまりに事例が多すぎることを指摘した。その上で，このような社会は基本食料となりうる豊富な季節的食料を大量に収穫し，大規模に備蓄して定住する技術＝経済システムを基礎にしているとテスタールは主張した。

テスタールの考えでは威信財の発展も以下のように大規模備蓄と関係している。食料の備蓄は保存性に限界があるが，余剰食糧を耐久生産財である貴重品に変換することで，備蓄が無制限になる。備蓄物は他者に贈与することで威信に変換することが出来るが，耐久生産財は，食料の贈与よりも広い地域で大規模に贈与を行うことを可能にし，これらを背景にして社会＝経済的不平等が芽生えるという（Testart 1982: 525–528; テスタール 1995: 43–55）[5]。

渡辺仁はテスタールによる大規模備蓄に基づく階層化論を批判し，生業分化に基づく階層化を論じた（Watanabe 1983, 1998; 渡辺 1990, 1992: 80–91）。渡辺によれば狩猟採集民社会は成人男性の全員が狩猟者であることが求められる万人狩猟者制社会と，非狩猟者の存在が許される非狩猟者許容社会に分けられ，後者の社会では生存に必要な食料は水産資源などで賄うことができるため，狩猟は主に威信獲得活動として行われるとい



地図 2　Townsend（1980）による平等主義社会とランク社会の境界（太線），Schweitzer（2003）が提案する「地位あるポジションが制限された社会」と「内的なヒエラルキーを有する社会」の境界（細破線），双方的出自集団と単系出自集団の境界（太破線）
（出典：Schweitzer 2003: 88, Figure 4. 2）

う（渡辺 1992: 80–81）。環北太平洋沿岸の先住民社会は，大型獣狩猟を中心に行う家族と，漁労を中心に行う家族の分化が見られ，技術的に難しく熟練を必要とする大型獣狩猟（クマ猟，捕鯨など）に専門的に従事する者の威信が高く，社会の上層（富者）を形成した（渡辺 1990: 64–65; 1992: 80–81）。

渡辺によれば，富者には威信の保持や向上のために威信財の獲得が必要であり，この競争的需要が威信財の現地生産や遠距離交易を発展させた（渡辺 1990: 66–67）。さらに，威信財は婚姻制度や紛争調停制度と結びつくことで，社会を一層複雑化する要因の一つになっているという（渡辺 1992: 80–82）。渡辺の理論は豊かな環境という生態的条件を前提とする点で他の論者と共通するが，余剰生産物を階層化の主軸に置かない点で特異な階層化論であるといえる。この理論はアイヌ民族を対象とした渡辺自身の民族誌調査から導出されており，アイヌを含めた環北太平洋の先住民社会に広くみられる社会の階層性と生業分化現象の共伴を説明しうるという利点があるが，国際的な認知度は低く，文化人類学においても充分に検討されてきたとは言い難い。

テスタールや渡辺以降の研究としてピーター・シュバイツアーの議論がある（Schweitzer 2003）。シュバイツアーは新旧両大陸の環北太平洋沿岸において，生態学的環境はほとんど同一であるにも関わらず不平等のレベルが社会ごとに異なることを問題とし，これまでの多くの先行研究が取っていた生態学的アプローチや唯物論的アプローチではこの問題を説明できないと主張した（Schweitzer 2003: 89–92）[6]。まず彼はタウンセンドが，南アラスカのランク社会より北側の社会を全て平等主義社会と見なしたことを再考し，北方アサバスカンの諸社会は完全なランク社会とはならなかったが，社会内部にヒエラルキーや固定的なリーダーシップのポジションといった要素があり，ランク化した社会の範疇に含めうると主張した（Schweitzer 2003: 86–89）。そしてアラスカの諸社会における平等主義社会とランク社会というラベルをそれぞれ「地位あるポジションが制限された双方的親族社会（bilateral societies with limited-status positions）」と「内的なヒエラルキーを有するリネージ社会（lineage societies with internal hierarchies）」という概念に置き換えることを提案する（Schweitzer 2003: 86–89）（地図２）。

その上でシュバイツアーは「地位あるポジションが制限された双方的親族社会」としてチュクチ，イヌピアック，シベリア・ユピックを取り上げ，彼らの捕鯨集団の親族組織に注目する（Schweitzer 2003: 92–96）。捕鯨集団はキャプテン，銛打ち，漕ぎ手から構成され，いずれもキャプテンの双方的親族から抜擢される。しかしながら，シベリア・ユピックでは明らかに父系親族から構成員を抜擢する傾向があり，イヌピアックでは血縁関係にない者であっても能力によって抜擢し，構成員にすることによって親族的繋がりを構築していくという柔軟な親族解釈が存在する。三社会は19世紀中庸に商業捕鯨の影響を受けた。その結果，19世紀後期において，イヌピアックのキャプテンはビッグマン化し，社会生活全般に影響力を持つようになっていたが，チュクチとシベリア・ユピックの社会ではキャプテン以外にも権威あるポジションが存在したため，キャプテンの権威は海獣狩猟に限定されていた。この違いをシュバイツアーは，商業捕鯨の影響自体は三社会に大きな違いはなかったが，イヌピアック社会においてはキャプテン以外の権威の不在や，柔軟な親族解釈が結びついたことで，キャプテンのビッグマン化が誘発され

たと解釈している（Schweitzer 2003: 92–96）。このようにシュバイツアーは不平等の出現に関する議論で重視されてきた外的要因を重視する生態学的説明を退け，社会内部の構造との関係において平等や不平等を理解する必要を示した。

残念ながらシュバイツアー以降，文化人類学分野において環北太平洋地域を対象とした階層化研究はほとんど見られない。この研究領域は現在，主に考古学者たちによって議論が進められている。代表的な研究をいくつか紹介したい[7]。まず，北西海岸に接した内陸部である北西平原（Northwest Plateau）地域を専門とするブライアン・ヘイデンは，この地域を含めた狩猟採集民社会の複雑化について一般的なモデルを提案している（Hayden 1998）[8]。

ヘイデンによれば，人類社会には彼が「アグランダイザー（aggrandizer）」と呼ぶ，社会・政治・経済的に積極的な野心的リーダーが普遍的に存在し，彼らが自己の利益を拡大するために，余剰を用いて様々な戦略を実行することが人類社会に変化をもたらす主要な要因だという（Hayden 1998: 18–25）。この野心的リーダーの戦略は競争的饗宴，戦争の扇動や和議の締結，富を使った同盟など多岐に渡り，その中に威信物（prestige objects）の製造と使用が位置づけられる（Hayden 1998: 19–22）。ヘイデンのモデルは余剰を威信に変換していくという点でフリードマンやテスタールの議論に類似しているが，それを実行していくアグランダイザーというエージェントを設定する点に特異性がある。また威信財の使用を，社会的複雑化を引き起こすアグランダイザーの戦略の一部として位置づけているため，威信財と社会的複雑化の関係を考えるのに適したモデルだと言えるだろう。

北西海岸地域ではケネス・エイムスとハーバート・マシュナーが，この地域における人類の移住から近代までの社会変化を概説している（エイムス／マシュナー 2016）。両者は北西海岸における階層化は，アーケイック期（紀元前10500〜4400年）の埋葬方法にすでにその起源を見ることができ，完全な平等主義社会から階層化したというよりは，太古にあった社会的差異が発展していったと考えられると主張している（エイムス／マシュナー 2016: 188–198; 261）。

コディアク島における社会の複雑化についてはベン・フィッツヒュー（Fitzhugh 2003a; 2003b; 2020）の研究が代表的である。彼は進化生態学，社会生態学の視点から環北太平洋全体にも適用可能な社会の複雑化モデルを設定した上で，その有効性をコディアク島における社会の歴史的変化を事例に実証している。彼のモデルでは相対的に資源の安定性や生産性がかなり高い区画と，低い区画が入り交じった環境を経済的，政治的不平等の基盤と見なす。人口密度が低くても，高質な区画を防衛する集団とそうではない集団との間には経済的不平等が生じうるが，冬期のための貯蔵技術が無い場合は区画を防衛する価値は低く，むしろ冬期の居住の移動性を高め，資源のシェアリングを行う戦略が生存上，有利となる（Fitzhugh 2003a: 18）。このような社会は比較的平等性が高い社会

である。その後，貯蔵などの技術革新が生じると，定住性が高まり人口密度が増大する。この場合，高質な区画を支配／防衛している集団は，そうでない集団よりも競争において有利になり，資源へのアクセス権を持たない者の中には従属を選択する者も出現することで，社会・経済的不平等が進展する（Fitzhugh 2003a: 18–21）。資源密度の空間的ばらつきや防衛性を本質的に重要と見なす考えは，近年の全人類史的な不平等研究が提案する一般モデルでも採用されており，社会・経済的不平等の起源を考える上で有力な仮説の１つである（e.g., Smith et al. 2019: 9–13; 20–21）。

フィッツヒューの議論で興味深い点は，威信財を含む威信経済の起源を，資源を巡る競争に求める点である。資源競争に多額のコストがかかる場合，自己の優位さを示すことが物理的な競争を避けることに繋がるため，生存戦略上の利点になりうる。この有意さの表示のために精巧な工芸品や，遠距離交易に基づく品といった威信財が発展するとフィッツヒューは主張している（Fitzhugh 2003a: 21–22）。この考えは進化生態学や進化心理学で使用されるコストリー・シグナリング理論（costly-signaling theory）を応用したものであるが，コストリー・シグナリングとしての威信財という考えは，贈与論以降考えられてきた，威信財の本質を贈与や交換と見なす視点とは異なっている。この論点は，考古学者のエイミー・プロードの論考を元に後述する。

先史アサバスカン社会の複雑化についてはコリー・クーパーが銅製品と社会的複雑性の関係を分析している（Cooper 2006; 2012）。アラスカ州・ユーコン準州の一部では自然環境下で高純度の銅が銅塊の状態で採集でき，この地域に暮らす北方アサバスカン諸族や周辺民族は欧米社会との接触以前から銅を利用してきた。クーパーはこの地域の自然銅資源の分布，銅製品を伴う遺跡の分布，出土した銅製品の種類，銅製品の製造法，使用法，交易，素材としての有効性などを総合的に分析し，銅の使用が社会の複雑化をもたらしたとは言えないが，銅製品とその知識の拡散は，先に言及したブライアン・ヘイデンのいう野心的リーダーである「アグランダイザー（aggrandizer）」による，銅の採掘地や交易を支配しようとする戦略の中で促進されたと主張している（Cooper 2012）。

クーパーによれば北方アサバスカンでは銅と威信（あるいは威信的な要素）との結びつきを示すエスノヒストリー的記録が多く存在する一方で，考古学的証拠は銅製品が威信財ではなく実用品であったことを示している。このエスノヒストリーと考古学的証拠の分離について，クーパーは(a) 平等主義から階層化しつつある社会（transegalitarian society）において，個人的な富をディスプレーすることはアグランダイザーの戦略として不利に働いた。(b) 北方アサバスカンにおいて富や威信をもたらしたのは銅の支配と交易であり，ディスプレーではない。(c) アラスカやユーコン準州において銅の使用は歴史的に新しく，威信領域への銅の介入は比較的近年になって生じたのかもしれないという３つの要因を提示している（Cooper 2012: 582）。

考古学的研究では無いが，クーパーの議論に対して野口と近藤は18〜20世紀前半の北

方アサバスカンの銅製ナイフを使用法の観点から分析した。両者は銅製ナイフが実用品と威信財の両方の性格を持っており，その威信は交易活動だけではなく，危険な大型獣と対峙するという生業活動も基盤にしていると分析している（野口・近藤 2017: 22; Noguchi and Kondo 2019: 96–98）。銅製ナイフは主に狩猟具や武器として，特に大型獣狩猟や戦争で使われたが，20世紀前半の写真を分析すると白人社会との権利交渉の場など，狩猟とは関係の無い文脈でもナイフを身につけている様子が認められる。このことから北方アサバスカン社会における銅製品のディスプレー性を否定したクーパーの議論を批判し，北方アサバスカンにおいては北西海岸のような派手なディスプレーではなく，日常で着用するようなささやかなディスプレー形態を考える必要があると主張している（Noguchi and Kondo 2019: 97–98）。

環北太平洋の研究ではないが，威信財に宿る生業活動由来の威信とディスプレーという論点については，威信財の起源と社会の複雑化の関係をコストリー・シグナリング理論を用いて説明するエイミー・プロードのモデルが示唆に富んでいる（Plourde 2010）。彼女のモデルでは，社会的・生物学的な成功者と，成功者を模倣する追従者が想定される。成功者は追従者から得られる利益が大きい場合のみ追従者を受け入れ，成功モデルを伝授する。しかし，成功者の数が多い場合，成功者同士の間で追従者獲得の競争が発生する。ここで，追従者を獲得するために自己の技術的卓越さ（狩猟やクラフト生産の技術，環境知識，外部の集団との個人的関係など）を示す広告としての威信財が生じうる。なお，この種の威信財は広告として表示している技術的卓越さの真正性を保証するために，製造にコストがかかるモノでなければならない（Plourde 2010: 143–144）。

彼女によれば平等主義社会におけるリーダーは，狩猟や交易といった特定の領域ごとに最も経験や高い技術を持つ者が，その都度，一時的に選ばれる傾向がある（Plourde 2010: 146–147）。しかし，近隣集団との競争など集団行動が求められる選択圧がかかると，リーダーがいる集団はそうでない集団より優位に立てるため，リーダーシップの重要性が高まり，リーダーの役割はより持続性のあるものになる（Plourde 2010: 146–147）。そして，永続的なリーダーのような社会的地位や社会階級が発展すると，潜在的な配偶者，同盟者，競争相手などに自らの地位情報を伝える利点が生じる。ここで威信財はこれまでのような個人的技術だけではなく，地位情報を伝えるように変化する（Plourde 2010: 147–148）。そして，威信財が地位情報を表示できるなら，威信財を所持したり，誇示したいという人々の欲求は高まり，それに応じてリーダーは，威信財を分配することで追従者をより惹きつけるなど，その戦略を変化させていく（Plourde 2010: 147–148）。彼女のモデルの興味深い点は，技術的卓越さを示す威信財は，社会経済的ヒエラルキー，リーダーシップの役職を巡る競争，社会的不平等の存在といった社会的複雑性に先行して出現し，威信財の使用が社会的複雑化の要因の１つであると位置づけている点である。

5 結論

ここまで文化人類学分野における威信財研究と環北太平洋における階層化論を概観してきた。威信財研究の出発点となったボアズの研究には威信財を交換に強く結びつける視点が見られる。ボアズは，ポトラッチを財の分配と同一視し（Boas 1897: 341），また別の箇所では銅板は我々にとっての高額紙幣と同じ機能があると指摘する（Boas 1897: 344）。文化人類学は威信財そのものよりも贈与・交換・分配といった現象に注目してきたため，広義の交換以外での威信財の利用（その代表がディスプレーである）は部分的に言及されるに留まり（e.g., 渡辺 1990: 67, 1992: 83; マリノフスキ 2010: 129–135），全体的に見てそれほど注意が払われてこなかった。しかし，それでも威信財をめぐる異文化の事例は，近代人類学の発展に大きく寄与し，フリードマンらが示したように，威信財が社会の複雑化に強く関係しているという重要な論点も提出されてきた。

環北太平洋地域の社会階層化に関する文化人類学的研究は，狩猟採集社会を無批判に平等主義社会と見なす潮流を批判し，狩猟採集社会における階層化や社会・経済・政治的不平等の出現という人類史上の重要な論点を提示したが，2000年代初頭から大きな進展が見られない。高倉（2021: 231）はその理由を文化人類学における植民地主義批判や世界システム論の影響であると指摘しているが，階層化論や威信財論の中心となっていた経済人類学の動向やマルクス主義人類学，新進化主義人類学の停滞も関係しているように思われる[9)]。さらに，環北太平洋地域では現地社会の近代化の中で，本論文で見てきたような階層性はほぼ消滅し，フィールドワークによって新たな情報を追加することが困難になったことも関係しているだろう。

文化人類学において環北太平洋地域の階層化研究が停滞する一方で，考古学分野では研究の蓄積が進んでいる。想定されているモデルは異なるが，社会の複雑化に威信財が何らかの形で関与しているという点は，多くの論者が主張している。中でもコストリー・シグナリング理論を応用したモデルでは，贈与・交換・分配のための威信財という観点とは異なる，技術的卓越さを示す威信財と社会的複雑性の関係が議論されている。これは交換対象物としての威信財という考えを否定するものではなく，威信財の性質についての理解を補充する考えである。

以上を踏まえて，今後の環北太平洋の威信財研究の課題を指摘して本論文の結びとしたい。

まずは停滞している環北太平洋の文化人類学的な社会階層化論を再開する必要があるだろう。この停滞を打破する鍵の１つが近年の考古学の成果と威信財への注目であると筆者は考える。コストリー・シグナリング理論によって示された，技術的卓越さを示す威信財という観点は狩猟採集民の威信財を考える上で特に重要である。環北太平洋の諸

社会において表示すべき技術的卓越さとして考えられるものに，狩猟技術がある。渡辺仁は大型獣狩猟者と漁労者との分化が社会的複雑化の要因だと見なし，大型獣狩猟が威信に大いに結びつく実践であったことを指摘した（渡辺 1992: 80–81）。ここから，大型獣狩猟の技術を示す威信財の存在が示唆される。例えばアリュートが用いた木製の狩猟帽は捕鯨の威信に結びついたモノだったことが指摘されており（Black 1991），先述したとおり筆者と近藤も北方アサバスカンの銅製ナイフがクマ猟を主とする大型獣狩猟の威信と密接に結びつくモノだったことを指摘した（Noguchi and Kondo 2019）。

もちろん，狩猟採集社会の全ての威信財が，狩猟などの生業活動を威信の基盤にしていると主張するわけではない。しかし，例えば北方アサバスカン社会で衣服などに装飾される交易品のビーズは，毛皮交易期に富の象徴として機能したが，その威信の基盤はビーズの獲得に必要となる交易用の毛皮を生産できる猟師としての力量にあるとも指摘されている（Duncan 1989: 189–190; 井上 1999: 39–40）。このように一見して交易と強く結び付く威信財であっても，その威信の基盤は交易活動だけではなく，生業活動と表裏一体であることもある。したがって，生業活動の威信と物質文化の関係は，威信財の威信の基盤が概ね，外部社会との結びつきや交易活動に起因すると見なされてきた学説史を踏まえると，環北太平洋のより多くの社会や物質文化全体の中で検討される必要があるだろう。

さらに，これらのことを踏まえて威信財と社会的複雑化の関係を再考する必要がある。仮に生業活動由来の威信を持つ威信財というカテゴリーが，環北太平洋の狩猟採集民社会に広範に存在するのであれば，その種の威信財が社会の複雑化にどう結びつきうるのかを，交易や外部社会とのつながりを威信の基盤とする威信財の使用法との比較において明らかにする必要がある。同様に，威信財をディスプレーしたり，狩猟技術を他者に誇示することと社会的複雑性の関係も探求される必要があるだろう[10)]。

このように威信財への注目は環北太平洋の社会的複雑化の研究に新たな知見を提供しうる。文化人類学において威信財はモースの『贈与論』に重要な事例を提供し，交換を基軸とする社会の性質について豊かな知見を提供してきた。その一方で，贈与や交換の局面だけに限らない，財宝（威信財）と社会との関係を総合的に明らかにする「財宝論」は今後の発展が求められる。環北太平洋の狩猟採集民社会における威信財研究はこの研究領域への貢献が期待できるだろう。

注

1）文化人類学や考古学における威信財研究の簡潔なレビューとしてすでに石村（2004; 2008），小杉（2006），下垣（2018）などがあり，本論文でも文献の選定や理解にあたり参考にした。

2）全目的貨幣であっても，原始貨幣にあった呪術用や装飾用といった機能は近代貨幣から除去されてきたことも指摘されている（ポランニー 1980: 190–191）。
3）サーリンズは「援助しあう近親者とは，とりわけて空間的ないみでの近い親戚にほかならない」（サーリンズ 1984: 239）とする。そして「世帯，キャンプ，集落，村落の人々にたいしては，交渉が密であり，和やかな連帯性が必須」であるが，「部族は同じだが他の村の人々をとおり，ついで部族間の圏域へとひろがるにつれて，交換の寛大さはそれだけ減少してゆく」と指摘する（サーリンズ 1984: 239）。このように，社会的距離は概ね，空間的距離に一致すると考えられる。
4）ゴドリエは貴重品を，「ある社会関係（結婚，秘密結社への入信，部族間の政治同盟）を創出するために，また，社会諸関係のなかの不和を（祖先への寄進，殺人や侮辱にたいする償いによって）解消するために，さいごに，上位の社会的地位を（ポトラッチや，重要人物，首長ないし王が蓄積し再分配する奢侈品によって）創出したり象徴化したりするために，みせびらかしたり，贈与したりあるいは再分配したりする物品」と定義している（ゴドリエ 1976: 220–221）。この定義は社会問題を解決したり社会課題を実行したりするためのモノというヘイデンの定義とほぼ同義であり，ゴドリエの言う貴重品は威信財と読み替えてもよいだろう。
5）テスタールの議論は，狩猟採集社会において狩猟成果を即時に分配する「即時リターンシステム」を持つ社会と，貯蔵してから分配する「遅延リターンシステム」を持つ社会に分類し，前者でのみ完全な平等主義が見られると指摘したウッドバーンの議論によく類似している（Woodburn 1982）。
6）シュバイツアーは極めて豊かな環境に暮らすイテリメン社会の平等性は文化生態学的アプローチでは説明できないとするが，イテリメン社会でも階層化の出現が見られたとする見解（シュニレルマン 2002）もある。
7）北西海岸とカリフォルニアの社会的階層化研究については羽生（2005）が簡潔にまとめている。
8）ヘイデンの複雑化モデルは，例えば近世アイヌ社会における宝の社会的機能と格差の増大の分析（岩崎 1998; 瀬川 2007）などとよく整合しているように思われる。
9）経済人類学の展開についてはハンとハート（2017）などを参照されたい。
10）筆者は最近，別の論考で北西海岸の威信財を富自体の威信財と富の記号の威信財の 2 種に分類し，両者のディスプレーとしての機能を分析した（野口 2021）。

参照文献

＜和文＞
石村智
2004 「威信財システムからの脱却」考古学研究会編『文化の多様性と比較考古学』pp. 279–288, 岡山：考古学研究会。
2008 「威信財交換と儀礼」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『儀礼と権力』（弥生時代の考古学7）pp. 127–139，東京：同成社。
2014 「首長制とは何か」考古学研究会編『考古学研究会60周年記念誌考古学研究60の論点』pp. 107–108，岡山：考古学研究会。
井上敏昭
1999 「『文化伝統』としてのビーズワーク ── アラスカ・グイッチン社会におけるビーズワークの役割とそこにみる社会的重要性に関する考察」『北海道立北方民族博物館研究紀要』8:

31–55。
岩崎奈緒子
1998 『日本近世のアイヌ社会』東京：校倉書房。
エイムス, K. M.／H. D. G. マシュナー
2016 『複雑採集狩猟民とはなにか』佐々木憲一監訳，設楽博己訳，東京：雄山閣。
岸上伸啓
2015 「環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究の歴史と現状──日本人による文化人類学的研究を中心に」岸上伸啓編『環北太平洋地域の先住民文化』（国立民族学博物館調査報告 132）pp. 7–77，大阪：国立民族学博物館。
2016 「『贈与論』再考──人類社会における贈与，分配，再分配，交換」岸上伸啓編『贈与論再考』pp. 10–39，京都：臨川書房。
小杉康
2006 「威信」安斎正人編『現代考古学事典　縮刷版』pp. 18–23，東京：同成社。
ゴドリエ, M.
1976 『人類学の地平と進路』山内昶訳，東京：紀伊國屋書店。
2000 『贈与の謎』山内昶訳，東京：法政大学出版局。
サーヴィス, E. R.
1972 『狩猟民』蒲生正男訳，東京：鹿島出版会。
1979 『未開の社会組織──進化論的考察』松園万亀雄訳，東京：弘文堂。
サーリンズ, M. D.
1972 『部族民』青木保訳，東京：鹿島出版会。
1984 『石器時代の経済学』山内昶訳，東京：法政大学出版局。
下垣仁志
2018 『古墳時代の国家形成』東京：吉川弘文館。
シュニレルマン, V. A
2002 「階層制社会とその経済的基盤──カムチャツカの事例から」佐々木史郎編『開かれた系としての狩猟採集社会』（国立民族学博物館調査報告 34）pp. 71–93，大阪：国立民族学博物館。
スチュワード, J. H.
1979 『文化変化の理論──多系進化の方法論』米山俊直・石田紝子訳，東京：弘文堂。
瀬川拓郎
2007 『アイヌの歴史──海と宝のノマド』東京：講談社。
高倉浩樹
2021 「狩猟採集と不平等──不平等社会確立の条件に関する試論」寺島秀明編『生態人類学は挑む Session 2 わける・ためる』pp. 223–242，京都：京都大学学術出版会。
テスタール, A.
1995 『新不平等起源論──狩猟＝採集民の民族学』山内昶訳，東京：法政大学出版局。
野口泰弥
2021 「威信財としてのトーキング・スティック──北米北西海岸における物質文化と『言葉の階層化』現象」津曲敏郎先生古稀記念集編集委員会編『津曲敏郎先生古稀記念集』pp. 39–61，網走：津曲敏郎先生古稀記念集編集委員会。
野口泰弥・近藤祉秋
2017 「狩猟具に宿る威信──18世紀末～20世紀前半におけるアサバスカン社会のナイフ使用について」『北海道立北方民族博物館研究紀要』26: 1–30。

羽生淳子
2005 「北米北西海岸とカリフォルニアの狩猟採集民」佐藤宏之編『食料獲得社会の考古学』pp. 222–237，東京：朝倉書店。
ハン，C.／K. ハート
2017 『経済人類学』深田淳太郎・上村淳志訳，東京：水声社。
フリードマン，J.
1980 「部族システムの動態と変換──カチン族の事例」山崎カヲル編訳『マルクス主義と経済人類学』pp. 201–243，東京：柘植書房。
フリーマン，M.
2006 「北太平洋圏の生態系」笹倉いる美訳，北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』pp. 19–33，網走：北海道立北方民族博物館。
ポランニー，K.
1980 『人間の経済 1 ──市場社会の虚構性』玉野井芳郎・栗本慎一郎訳，東京：岩波書店。
2003 『経済の文明史』玉野井芳郎・平野健一郎編訳，東京：筑摩書房。
マリノフスキ，B.
2010 『西太平洋の遠洋航海者』増田義郎訳，東京：講談社。
モース，M.
2014 『贈与論　他二編』森山工訳，東京：岩波文庫。
リーチ，E. R
1987 『高地ビルマの政治体系』関本照夫訳，東京：弘文堂。
レヴィ＝ストロース，C.
2018 『仮面の道』山口昌男・渡辺守章・渡辺公三訳，東京：筑摩書房。
渡辺仁
1988 「北太平洋沿岸文化圏──狩猟採集民からの視点 I」『国立民族学博物館研究報告』13(2): 297–356。
1990 『縄文式階層化社会』東京：六興出版。
1992 「北洋沿岸文化圏──狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」宮岡伯人編『北の言語──類型と歴史』pp. 67–107，東京：三省堂。

＜欧文＞
Augerot, X.
2005 *Atlas of Pacific Salmon: The First Map-Based Status Assessment of Salmon in the North Pacific*. Berkeley: University of California Press.
Black, L. T.
1991 *Glory Remembered: Wooden Headgear of Alaska Sea Hunters*. Juneau: Friends of the Alaska State Museums.
Boas, F.
1897 Social Organization and Secret Societies of the Kwakiutl Indians. *Report of the United States National Museum for the Year Ending June 30, 1895,* pp. 311–738. Washington DC: Government Printing Office.
1966 *Kwakiutl Ethnography*. Edited by H. Codere. Chicago and London: The University of Chicago Press.

Bohannan, P.
1959 The Impact of Money on an African Subsistence Economy. *The Journal of Economic History* 19(4): 491–503.
Cooper, H. K.
2006 Copper and Social Complexity: Frederica de Laguna's Contribution to Our Understanding of the Role of Metals in Native Alaskan Society. *Arctic Anthropology* 43(2): 148–163.
2011 The Life (Lives) and Times of Native Copper in Northwest North America. *World Archaeology* 43(2): 252–270.
2012 Innovation and Prestige among Northern Hunter-Gatherers: Late Prehistoric Native Copper Use in Alaska and Yukon. *American Antiquity* 77(3): 565–590.
Duncan, K. C.
1989 *Northern Athapaskan Art: A Beadwork Tradition*. Vancouver: Douglas and McIntyre.
Fitzhugh, B.
2003a The Evolution of Complex Hunter-Gatherers on the Kodiak Archipelago. In J. Habu, J. M. Savelle, S. Koyama, and H. Hongo (eds.) *Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim* (Senri Ethnological Studies 63), pp. 13–48. Osaka: National Museum of Ethnology.
2003b *The Evolution of Complex Hunter-Gatherers: Archaeological Evidence from the North Pacific*. New York: Springer Science + Business Media.
2020 Reciprocity and Asymmetry in Social Networks: Dependency and Hierarchy in a North Pacific Comparative Perspective. In L. Moreau (ed.) *Social Inequality before Farming? Multidisciplinary Approaches to the Study of Social Organization in Prehistoric and Ethnographic Hunter-gatherer-fisher Societies*, pp. 233–254. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.
Fried, M. H.
1967 *The Evolution of Political Society: An Essay in Political Anthropology*. New York: Random House.
Friedman, J. and M. J. Rowlands
1978 Notes Toward an Epigenetic Model of the Evolution of 'Civilization.' In J. Friedman and M. J. Rowlands (eds.) *The Evolution of Social System*, pp. 201–276. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
Hayden B.
1998 Practical and Prestige Technologies: The Evolution of Material Systems. *Journal of Archaeological Method and Theory* 5: 1–55.
2014 Social Complexity. In V. Cummings, P. Jordan, and M. Zvelebil (eds.) *The Oxford Handbook of the Archaeology and Anthropology of Hunter-Gatherers*, pp. 643–662. Oxford: Oxford University Press.
Kopytoff, I.
1986 The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In A. Appadurai (ed.) *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*, pp. 64–91. Cambridge: Cambridge University Press.
Lee, R. B. and I. Devore
1968 Problems in the Study of Hunters and Gatherers. In R. B. Lee and I. Devore (eds.) *Man the Hunter*, pp. 3–12. New York: Aldine de Gruyter.

Legros, D.
1985 Wealth, Poverty, and Slavery among 19th-Century Tutchone Athapaskans. *Research in Economic Anthropology* 7: 37–64.
Noguchi, H. and S. Kondo
2019 Hunting Tools and Prestige in Northern Athabascan Culture: Types, Distribution, Usage, and Prestige of Athabascan Daggers. *Polar Science* 21: 85–100.
Plourde, A. M.
2010 Human Power and Prestige Systems. In P. M. Kappeler and J. B. Silk (eds.) *Mind the Gap: Tracing the Origins of Human Universals*, pp. 139–152. Heidelberg, Dordrecht, London, and New York: Springer-Verlag Berlin Heidelberg.
Polanyi, K.
1977 *The Livelihood of Man*. Edited by H. W. Pearson. New York: Academic Press.
Schweitzer, P. P.
2003 Levels of Inequality in the North Pacific Rim: Cultural Logics and Regional Interaction. In J. Habu, J. M. Savelle, S. Koyama, and H. Hongo (eds.) *Hunter-Gatherers of the North Pacific Rim* (Senri Ethnological Studies 63), pp. 83–101. Osaka: National Museum of Ethnology.
Smith, M. E., T. A. Kohler, and G. M. Feinman
2019 Studying Inequality's Deep Past. In T. A. Kohler and M. E. Smith (eds.) *Ten Thousand Years of Inequality: The Archaeology of Wealth Differences*, pp. 3–38. Tucson: University of Arizona Press.
Testart, A.
1982 The Significance of Food Storage among Hunter-Gatherers: Residence Patterns, Population Densities, and Social Inequalities. *Current Anthropology* 23(5): 523–537.
Townsend, J. B.
1980 Ranked Societies of the Alaskan Pacific Rim. In Y. Kotani and W. B. Workman (eds.) *Alaska Native Culture and History* (Senri Ethnological Studies 4), pp. 123–156. Osaka: National Museum of Ethnology.
Watanabe, H.
1983 Occupational Differentiation and Social Stratification: The Case of Northern Pacific Maritime Food-Gatherers. *Current Anthropology* 24(2): 217–219.
1998 Social Classification of Hunter-Gatherers: An Evolutionary Perspective. *Anthropological Science* 106: 64–76.
Woodburn, J.
1982 Egalitarian Societies. *Man* 17(3): 431–451.